

オスマン帝国における西洋軍事知識の受容

小松 香織

はじめに

非西欧世界の近代化を論じるとき、その契機としてつとに「西欧の衝撃」が指摘される。それは時に海から軍艦に乗って、時に陸から大軍に火器を携えて現れた。突然の外敵の脅威、さらに大敗北が伝統的な支配体制を動揺させ、近代化改革へと突き動かした。日本における18世紀末のロシア船の出現、黒船来航、四か国連合艦隊との戦い、清朝のアヘン戦争、ナポレオンのフランス軍にカイロを占領されたオスマン帝国統治下のエジプトなど、近代は西欧の暴力とともに訪れたのである。その結果、いずれの地域においても近代化政策はまずは喫緊の課題への対応、すなわち国防に重点が置かれ、それは西欧の軍事技術の導入から始まった。

筆者は、「一九世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」と題する科研プロジェクト¹に参加している。本研究は、国民国家が形成される19世紀を中心とし、軍人のグローバルな移動による人的ネットワークと、軍事関連書の翻訳・流通・受容という分析視角から、軍事的学知の交流を研究するものである。国民国家の形成過程において、軍人の中には士官学校への留学、在外公館付武官、観戦武官、あるいはお雇い外国人や軍事顧問団の一員として、外交官、政治家、法律家、教育者の顔を持ちながら、海外と交流した者がいた。当時の軍人は戦争に携わるだけではなく、学知の伝達者・媒介者でもあった。一方、軍事関連書物は、戦略・戦術など狭義の軍事学のみならず、現代の学問体系からみると、天文・地理・医学・数学・土木・建築など幅広い内容を含んでおり、複数の言語に翻訳されて、ヨーロッパ内外に伝わり受容された。当該研究では、軍人と軍事関連書による軍事的学知の交錯に光を当てることにより、軍事史的観点から新たな世界史像を提起することを目指している。筆者の役割はオスマン帝国における軍事的学知の受容を、西欧軍事書物の翻訳を通して考察することである。本稿は、上記の問題関心にに基づき、オスマン帝国において、軍事に関連して西欧からどのような書物が受容されたのか、特に翻訳書についてその実態を探求することを目的とする。

I オスマン帝国の軍事改革

オスマン帝国の近代史は1699年のカルロヴィッツ条約締結から語り始められることが多い²。第2次ウィーン包囲の失敗（1683）以後、神聖同盟³に対して敗北を重ねたオスマン帝国はこの講和条約の場に屈辱的な「敗戦国」という立場で臨み、初めてヨーロッパ領土の大規模な喪失を余儀なくされたのである。ある意味これはオスマン帝国にとって「西欧の衝撃」であったともいえよう。鈴木董も「同時代のオスマン帝国の人びとにも、対西欧関係における東方優位から西方優位への力関係の転換を印象づけた」と述べている⁴。実際これを機にオスマン帝国は軍事改革に着手することになる。まず軍事的敗北の要因と考えられたのが西欧諸国軍の先進性であった。ゆえに18世紀を通じて行われた改革の主眼は西欧の軍事技術の導入と西欧式軍団の創設であった。

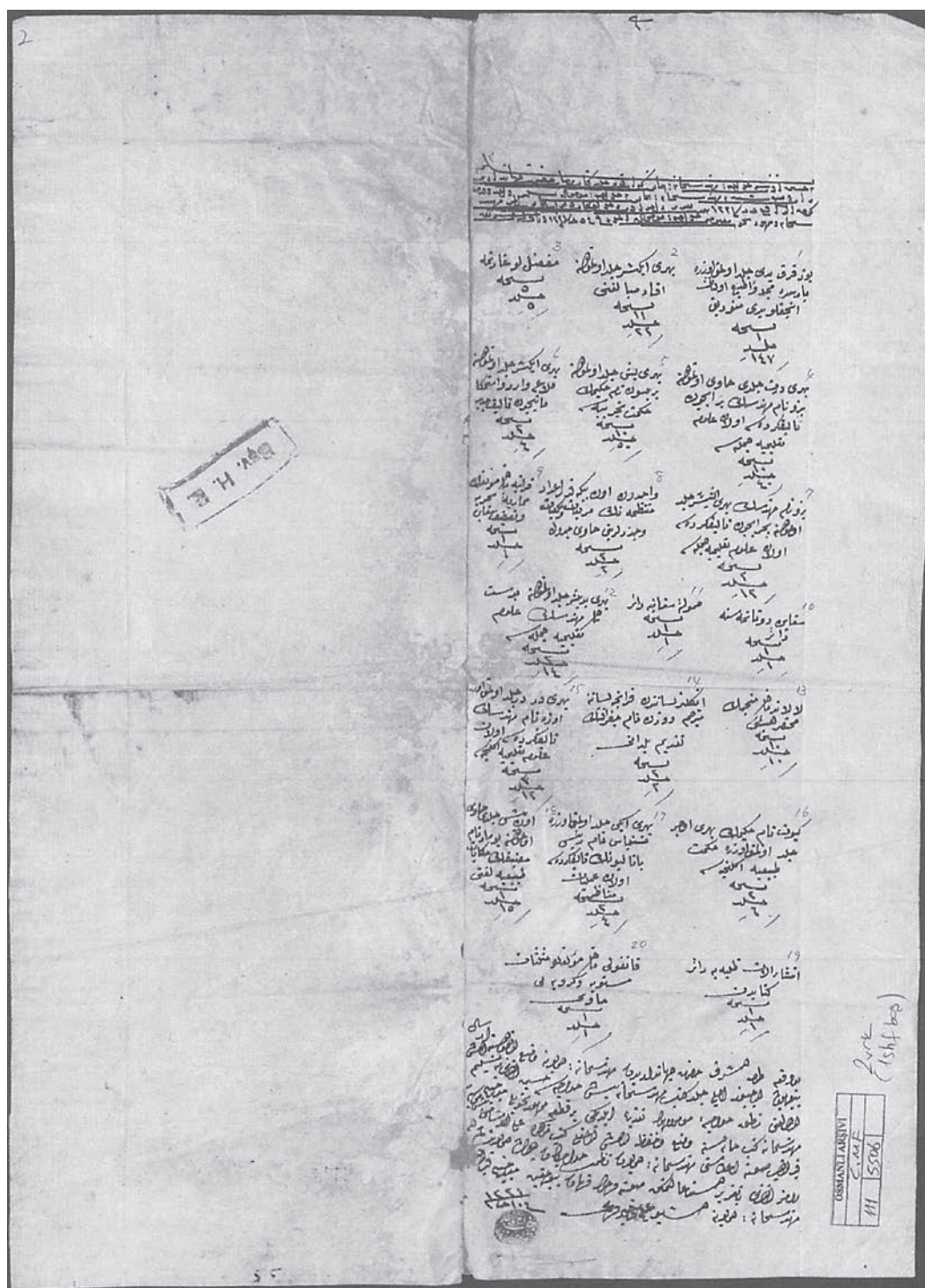
西欧文化の流行から「チューリップ時代」と呼ばれるスルタン・アフメト3世期（1703-30）、ボスタンジ連隊⁵から300名の若者を選抜して部隊を編成し、フランス人将校の指導の下でオスマン帝国初の西洋式の軍事演習が行われた。続くマフムト1世期（1730-54）には、ド・ボンヌヴァル伯（Claude Alexandre Comte de Bonneval）（1675-1747）による西欧軍事技術の導入が始まる。ボンヌヴァルはフランス人貴族の出自で軍人となるが、29才で軍規に違反し国外に逃亡した。オーストリア軍に入隊して将軍にまで昇進するも、1727年にオイゲン公と対立してオスマン帝国に亡命する。ムスリムに改宗し（ムスリム名：アフメト）、オスマン軍において砲兵（フンバラジュ humbaracı）隊の改革にあたり、1731年から砲兵隊を再編成して洋式軍事訓練を実施するなどの功績から「フンバラジュバシ（砲兵隊長）・アフメト・パシャ」と呼ばれた。また、イスタンブールの対岸（アジア側）のウスクダルに最初の工学校（hendesehâne）を開校する一方で、西欧の政情や軍事力に関する情報を提供した。しかし、彼の登用に積極的だったスルタン・マフムト1世の死後、保守派の巻き返しの中で彼が編成した砲兵隊は解散、工学校も閉鎖されてしまう。ムスタファ3世期（1757-74）には、西欧事情に強い関心を持つスルタンの下で西欧化政策に立ち返り、パロン・ド・トット（Baron de Tott）（1733-93）による軍事改革が行われた。トットはハンガリー人だがフランスに生まれ、軍人・外交官として実績を積み重ねた。フランス大使と共にオスマン帝国へ派遣されたが、その任務はオスマン帝国の情勢調査、オスマン語の修得、クリミアに関する情報収集であった。後にオスマン政府の要請を受けてオスマン帝国の軍事改革に携わり、工学校の再興、砲兵隊の西洋化、大砲製造法の改良、海軍工学校の設立など数々の功績をあげた。しかし、トットが帰国すると改革の機運は下火となってしまう。それでもアブデュルハミト1世期（1774-89）において改革は続けられた。大宰相ハリル・ハミト・パシャが、フランスから専門家を招き、陸軍工学校の設立、海軍ドックの改良などを行ったが、1784年に彼が失脚すると改革は頓挫してしまった。オスマン帝国における18世紀の軍事改革を総括するならば、いずれの改革も保守派の抵抗で短期間で挫折し、目標とした成果をあげることはできなかったといえよう。

本格的な西欧モデルの軍団はセリム3世（在. 1789-1807）⁶によって作られた。新軍団（ニザー

ム・ジェディード *Nizâm-ı Cedid*) と名付けられたこの組織は、文字通りまったく新しい西欧式の軍団であった。軍服も従来のイエニチェリ軍団とは異なり西欧風の装いとなった。同時に軍事技術の革新にも力が注がれ、西洋技術の導入（火薬工場、大砲・ライフル製造など）、砲術学校や陸軍工学校（*Mühendishâne-i Berri-i Hümayûn*）・海軍工学校（*Mühendishâne-i Bahrî-i Hümayûn*）の開設、技術専門書の翻訳が行われた。しかし、1807年に保守派のクーデタによってセリム3世が廃位されると、改革派は肅清され西欧化改革は再び停止されてしまった。改革派と保守派の対立から一進一退を繰り返した軍事改革だったが、これに終止符を打ち、もはや後戻りすることなく西欧化の流れを決定的なものとしたのがマフムト2世（在. 1808-39）である。それはイエニチェリ軍団の廃止から始まった。イエニチェリ軍団はスルタン直属の奴隷軍人の部隊で、長く帝国の中央常備軍の中核を担ってきた。オスマン軍団の代名詞ともなり西欧諸国からも恐れられてきた。彼らはデウシルメ⁷によって徴用され、身分は「スルタンの奴隷」であるが特権のエリート軍人たちだった。当初は少数精鋭であったが次第に増員し、14世紀末は2千人規模であったものが、16世紀中頃には1万2千人、17世紀に入ると4万7千人に膨れ上がった。それと共にその内実も変容していく。生涯独身のままイスタンブールの兵舎で起居を共にし、厳格な規律の下で平時は軍事訓練にいそんでいたものが、次第に妻子を持つようになり、その地位は世襲化していく。妻帯者は兵舎を出て市中で副業に従事し、軍事訓練は疎かになり、規律は弛緩していった。当然軍人としての質の低下は免れず、対外戦争、国内の反乱鎮圧といった戦場で弱体をさらけ出した。その一方で、市中では無頼化し民衆を圧迫するようになる。帝都イスタンブールでは待遇への不満からしばしば反乱を起こした。時に彼らは政治に介入し、政権転覆のクーデタにも大きな役割を果たすようになる。戦場では敗北を繰り返し、政情不安の要因となるその存在は、もはや無用の長物といえた。

マフムト2世は、1826年5月、新しい西欧型軍団（エシュキンジ *Eşkıncı*）の設立を発表した。これはニザーム・ジェディードの再来とみなされ、イエニチェリ下士官層の反発を喚起する作戦だった。予想通り、彼らは反乱を起こし、準備を整えていた洋式軍団（特に砲兵）と武器を与えられた民衆が彼らに襲い掛かった。首都のイエニチェリ（約6千人）は殲滅され、地方の残党も追討され、イエニチェリ軍団は廃止され姿を消したのである。代わって創設されたのが西欧式の新軍団で、「ムハンマド常勝軍（*Asâkir-i Mansûre-i Muhammediye*）と名付けられた。装備として兵卒に銃と剣が支給され、軍装は西欧式のジャケット、踵までの幅広ズボン、ブーツ、フェズ帽というものだった。イエニチェリ軍団の廃止は「慶賀の出来事（ヴァカーイ・ハイリーエ *Vak'â-i Hayriyye*）」と呼ばれた。同軍の廃止は武力を持った最大の抵抗勢力の排除を意味し、以後マフムト2世が行うことになるラディカルな西欧化改革を可能にした。

軍事改革に関しては、このころから陸海の士官学校・工学校、軍医学校などの教育機関の拡充、諸外国への留学生の派遣などによる西欧の軍事的学知の受容が本格化していく。オスマン公文書館（*Türkiye Cumhuriyeti Cumhurbaşkanlığı Osmanlı Arşivi*、以下 BOA と略す）所蔵史料で、主に19世紀の史料を集めたジェヴデト（*Cevdet*）分類で「翻訳」を検索すると73件の文書が出てきた。



1806 年にスルタンから軍工学校に贈られた 350 冊の仏・英語科学技術書の目録

(出典：BOA.C.MF.111-5506)

その中に「1806年にスルタンから軍工学校に贈られた350冊の仏・英語科学技術書の目録」というタイトルの史料⁸がある（写真参照）。文書の日付はヒジュラ暦1221年ジュマダー・アルウーラー月10日（西暦1806年7月26日）となっており、年代からセリム3世期のものとわかる。その内容をまとめたのが表1である。実際の文書を読むと、表題の「350冊」というのは寄贈された冊数で、本自体のタイトル数は20だった。本によっては『アカデミー辞書』や『医学実技』のように10冊程度贈られたものがあり、教科書として使うつもりであったと思われる。書名は表記されておらず、「〇〇に関するもの」とあるのみなので原書名はわからない。著者名が記されているものもあるが、外国人の名前をオスマン語で表記しているため、正確に誰かを特定することは難しい。原著の言語も不明である。1)は「パリで新刊」、14)も「英語からフランス語への翻訳」とあ

表1 1806年にスルタンから工学校に贈られた350冊の仏・英語科学技術書の目録

- 1) Paris'te müceddeden tab'olunan Ansiklopedi-i Metodik（パリで新刊の『テーマ別百科事典』：147巻）、1部
- 2) Akademya Lûğatı（『アカデミー辞書』：2巻）、11部
- 3) Mufasssal Lugartma（『詳解対数表』）、5部
- 4) Petro nam mühendisın yer için te'lifkerdesi olan 'ulûm-ı t'alimiye cümlesi（技師ペトロ著『〔軍事〕演習学全書』：4巻）、10部
- 5) Brilson nam hekimin hikmet-i tecrübiyesi（医師ブリルソン著『医学実技』：5巻）、10部
- 6) Kılâ' ve Ordu istihkâmât için te'lif-i cedid（要塞・築城術に関する新刊書：2巻）、2部4冊
- 7) Bezo nam mühendisın Bahr için te'lifkerdesi olan 'ulûm-ı t'alimiye cümlesi（技師ベゾ著『海軍演習学全書』：6巻）、2部
- 8) Vahidden on bine kadar a'dad-ı muntazamanın murab'at ve mik'abât ve cezerşerini havi cetveli（1～1万までの平方数と立方体数とその根の表）2部
- 9) Karatiye nam muellifin muharebe-i bahriye ve tasfî-i sefâ'in（カラティエ著『海戦と艦隊陣形』）、1部
- 10) Sefâ'in-i donanmasına dâir（艦船関係）、1部
- 11) Hamule-i sefâ'ine dair（輸送船関係）、1部
- 12) Bost nam mühendisın 'ulûm-ı t'alimiye cümlesi（技師ボスト著『〔軍事〕演習学全書』：7巻）、2部
- 13) Loland nam müneccimin muhtasar hesbi（天文学者ローランド著『簡明算学購本』）、10部
- 14) İngiliz lisanından Franca lisanına mütercim Vozn nam coğrafının takdim-i beledan（地理学者ボズン著『諸都市紹介』、英語からフランス語への翻訳）、2部
- 15) beheri 4'şer cilt olmak üzere, Öze nam mühendisın te'lifkerdesi olan 'ulûm-ı t'alimiye eğlencesi（技師オゼ著『〔軍事〕演習学提要』：4巻）、3部
- 16) Giyyot nam hekimin hikmet-i tabî'iye eğlencesi（医師ジオット著『医学提要』：3巻）、2部
- 17) Testipas nam reis-i batalyon'un te'lifkerdesi olan ameliyat-ı menâzır-ıya（テストィパス大隊長著『弁論教本』：2巻）、2部
- 18) Yomad nam musannfın hikâyât-ı tabî'iye lûğatı（ヨマド著『解説医学辞典』：15巻）、1部
- 19) İmtişar-ı âlât-ı zilliyeye dair kitabdan（日除け具の普及関係）、1部
- 20) Kanfoli nam mu'ellifin müsellesât-ı müsteviye ve kereviyeyi havi（カンフォリ著『平面・球面三角法』を含む）、1部

ることから、この2点はフランス語であると推察される。分野については、陸・海軍の軍事専門書、医学、天文学、数学といった科学技術関係の著作が多く、改革において西欧からどのような学知が求められていたのかわかる。しかし、原典から直接受容する方法は、知識の普及を限定的なものとせざるをえなかった。そのため、やがて数多くの専門書がオスマン語に翻訳されるようになる。次章ではオスマン帝国における軍事関係書物の翻訳について、イスタンブルの軍事博物館付属図書館（Askeri Müzesi Kütüphanesi）の蔵書を手掛かりに、その実態を明らかにする。

Ⅱ オスマン帝国における軍事関係書物の翻訳

オスマン帝国でどのような文献が翻訳されたのか。この問に答えるために注目したのが、トルコの近代史研究者イフサンオウル編の『オスマン帝国軍事関係文献の総合カタログ』（İhsanoğlu, Ekmeleddin(ed.), 2004 *Osmanlı Askerlik Literaturü Tarihi* (2 cilt), İstanbul, İslam Tarih, Sanat ve Kültür Araştırma Merkezi)である。同書はオスマン帝国期に出版された軍事関係の書物、論文の書誌データと解題で、ほぼすべての文献を網羅していると言っても過言ではない。その第2巻末に付された表8は「外国語からオスマン語に翻訳された文献の一覧表」⁹である。同表では計359点の文献があげられており、原典の言語は、アラビア語、ペルシア語、ラテン語、英語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、クロアチア語、ギリシア語である。うち最も多いのがドイツ語で102点、次はフランス語で89点、それに続くのは英語27点で、言語的には多くがドイツ語・フランス語の文献からの翻訳であったといえる。

この一覧表を手掛かりに翻訳書の実態を知ろうとすると、すぐに大きな壁につきあたった。翻訳者である当時のオスマン知識人には、原典のタイトル、著者名、出版年という最も重要な書誌データを記述する習慣がなく、これらの情報が何も記されていないのが普通であった。その場合タイトルはオスマン語訳から推察する以外にない。著者名に至ってはたとえ記されていても、元のラテン文字をアラビア文字に転写する際、決まったルールがなく、同じ表音文字とはいえ、母音・子音が西欧言語とは大きく異なるため、ラテン文字と対応させるのが難しい。こうした問題を克服しつつ原典を特定するためには、まずリストアップされた文献自体を確認する必要がある。そこで軍事関係の翻訳書を多く所蔵するイスタンブルの軍事博物館付属図書館で、この一覧表中同館が所蔵しデジタル化されている85点¹⁰の文献に目を通し研究ノートを作成した。まず、書名、著者名、翻訳者名、頁数、出版元、出版地、出版年といった基本的な書誌データを収集し¹¹、次に、本の内容について、目次などから全体の構成を把握するようにした。著者や翻訳者の序文がある場合はその部分を抽出し、出版の目的を知る手がかりとした。この結果をまとめ「トルコ共和国軍事博物館付属図書館所蔵軍事関係オスマン語翻訳書目録」とした（表2参照）。原典・原著者については特定もしくは推定できたもの¹²を「原典」欄に表示した。

以下、作成した目録に挙げたの文献について、いくつかの注目すべき点を取り上げ、オスマン帝国における軍事関係書物の翻訳の実態を考察していきたい。

表2 トルコ共和国軍事博物館付属図書館蔵軍事関係オスマン語翻訳書目録（言語略号：ドイツ語：G, フランス語：F, 英語：E）

史料 番号	配架 番号	言語	出版年	著者名	書名	原典（著者、書名、出版年）
1	34	G?	1874	Taybert（普、砲兵大佐）	Kale Topçuluğu（要塞砲術）	
2	77	G	1911	Freitag von Loring Hofen（普、男爵、大佐）	Yeni Piyade Talimnamesinin İzahı（解説・新歩兵操典）	Hugo von Freitag-Loringhoven, Das Exerzier-Reglement für die Infanterie vom 29. Mai 1906 kriegsgeschichtlich erläutert, Berlin: E. S. Mittler & Sohn, 1907.
3	86	G	1912		Yeni Rehberi-i Fenni-i Eslîha（新・兵器学案内）	
4	88	E	1894 (1896?)	William Bainbridge Hoff（米、海軍高官）	Son Usul Fenn-i Bahriye（最新海軍学）	
5	621	G?	1925	Brand（中佐）	Sivari Muharebe Meseleleri（騎兵戦の諸問題）	Heinrich von Brandt?
6	643	G?	1898	Carl von Schmidt	Sivari Snüfmin Talim ve Terbiye ve Sure-i Sevk ve İdaresi: 3. Cild Liva ve Fırka Talimi（騎兵科の教練と交戦・統帥法：第3章 旅団・師団教練）	Karl von Schmidt, Instruktionen des Generalmajors Carl von Schmidt, betreffend die Erziehung, Ausbildung, Verwendung und Führung der Reiterei, Berlin: Mittler & Sohn, 1876.
7	692	G	1915	Von Hohwächter（Hohhafter?）（少佐）	Türklerde Harbe（トルコ人と共に戦いへ）	
8	1056	G	1897	Von der Goltz	Harbin Sevk ve İdaresi（交戦と統帥）	Colmar von der Goltz, Krieg- und Heerführung, Berlin: R. v. Decker, 1901.
9	1475		1901	Dragomirof	Taburun Talim ve Terbiyesi（大隊教練）※イフサンオールの目録になし	Michail Ivanovič Dragomirov, Leitfaden für die Vorbereitung der Russischen Truppen zum Kampf, Übers. aus dem Russ. von von Tettau: Theil 1: Vorbereitung der Compagnie, Hannover: Helwing, 1889.
10	1546	G	1916	Ludendorff	Sahra Mevaziminin İnşası Hakkında Muhura（野戦築城に関する覚書）	
11	2530	F	1867		Sivariye ait Nişan Talimnamesi（騎兵のための射撃操典）	
12	3105	G?	1898	Prince de Hohenlohe-Engelfingen（普、陸軍大將）	Sivari Nefer ve Bağır Talim ve Terbiyesi hakkında Mütalaa（Musahabat?）（騎兵隊の兵馬教練に関する考察）	Karl August Eduard Friedrich zu Hohenlohe-Ingelfingen, Gespräche über Reiterei, Berlin: Mittler, 1887. ※可能性あり。
13	3114	G	1898 (1912?)	Balk	Gece Yürüyüş ve Muharebeleri（夜間行軍と戦闘）	Wilhelm (William?) Balk, Nachgefechte und Nachübungen: Studien aus Kriegsgeschichte und Friedensarbeit, Berlin: Verlag von R. Eisenschmidt, 1910.
14	3115	G	1901?	Von Birn	Piyade ve Sivarinin Endahtı ve Muharebedeki Hidenat ve Vezâfı（歩兵と騎兵の射撃および戦闘における任務）	
15	3153	G	1908	Von der Goltz	Devlet-i Aliyye'nin Zaaf ve Kuuveti（至高の国家（＝オスマン帝国）の弱点と強さ）	Colmar von der Goltz, Stärke und Schwäche des türkischen Reiches, in: Deutschen Rundschau, Band XXIV, 1 (Oktober 1897), pp.95-119.
16	3232			Maurice Brunner	Fenni-İstihkamat-ı Cesime Atlası（大要塞設計図）	
17	3268	G	1894	Litofor?（独、少佐）	Tarih-i Harbe Müstenid Tabiye Mısalleri（戦史に基づく戦術例）	
18	3279	E	1916	Milne（英、中將）	Selanik'de Ordumuz（サラニカにおける我が軍）	
19	3301	F	1922		Ordu'da Hidenatın Tanzimi（軍における役割の編成）	
20	3696	G	1912	Von Birn	Dağlık Nizamda Dizi ve Mangana Talim ve Terbiyesi hakkında Nikaht-ı Esasiye（Piyade ve Sivariye Mahsus）（分散隊形における戦列と班の教練に関する基本的要点）	
21	3819	G	1864	Grunwald（Iskender Paşa）	Topçuluk Fenni, Makalesi Salise（砲術：第3論文）	
22	4222	F	1850?		Avcı Talimi（散兵操典）	
23	4321	G	1897	Von der Goltz	Vakti Sefer ve Hazarda Erkan-ı Harbiye Vezâfı, Kısm-ı Nazarı（戦時および平時における参謀の役割、理論の部）	Goltzに該当なし。Paul Bronsart von Schellendorf, Der Dienst des Generalstabes, Berlin: Mittler, 1893?

24	4390	G	1921	Carl von Ammon (stivari yüzbaşı 騎兵大尉)	Stivari ve Makneli Tüfenk (騎兵と機関銃)	Captain von Ammon, Kavallerie, in, Die Militärischen Lehren des Grossen Weltkrieges, ed. Generalleutnant Max Schwarte (Berlin: Ernst Siegfried Mittler und Sohn, 1920) .
25	7254	G?	1888	Röhne (Heinrich Rohne?) (普, 中佐, 砲兵学校主席教官)	Prusya Nişangâhı Levhalarıyla Resmî Endahtı Kavânîni, Endahtı Kavânîninin Ta'sîsâtı ve Teşhîhâtı üzerine Emsile (プロシア式標的坂と公式射撃規定の詳説に基づく諸事例)	Heinrich Rohne, Schiesslehre für Infanterie unter bes. Berücks. des Gewehrs 88 und der Schiessvorschrift für die Infanterie, Berlin: E. S. Mittler & Sohn, 1886? もしくは Heinrich Rohne, Die Anwendung der Wahrscheinlichkeitslehre auf das Präzisionsschiessen der Infanterie, Berlin: E. S. Mittler & Sohn, 1900?
26	7451	G	1888	Von der Goltz	Millet-i Müselleha, Asrımızın Usulü ve Ahvâl-i Askeriyesi (武装せる国民, 今世紀の軍事情勢)	Colmar von der Goltz, Das Volk in Waffen : ein Buch über Heerwesen und Kriegführung unserer Zeit, Berlin: v. Decker, 1883.
27	7470	F	1897		İstihkamât-ı Dâime (常設要塞)	
28	7484		1901	Sarı do Voyd (Charles David?) (露, 参謀, 中将)	1870 Seferi Hakkında Münakaşât, Sedan Meydan-ı Muharebesine kadar Fransız-Alman Seferini Münağaşa eder (1870年戦争に関する議論, セダンの戦いまでの普仏戦争について)	
29	7531	G	1907		Sahra İstihkamâtı (平地要塞)	
30	7544		1898	Von der Goltz	Müstakil Keşif Kolları (独立偵察隊)	
31	7545	G	1910 (1908?)	Röhne (Ronet?) (大将)	Hâl-i Hazır Sahra Topçuluğu (今日の野戦砲術)	Heinrich Rohne, Über die Feuerwirkung der modernen Feldartillerie, Berlin: A. Bath, 1905? もしくは Heinrich Rohne, Zum Feldgeschütz der Zukunft, Berlin: A. Bath, 1907? の可能性あり
32	7607	F	1889	Mekel (戦術教官)	Sumuflı Selase Tabiyesi (三兵科戦術)	Jakob Meckel, Taktik, Teil: 1: Allgemeine Lehre von der Truppenführung im Felde, Berlin, 1883? もしくは Jakob Meckel, Die Elemente der Taktik: mit Holzschnitten im Text u. 2 Kartenskizzen, 2., durchgearb. Aufl., Berlin: Mittler, 1883? もしくは Jakob Meckel, Allgemeine Lehre von der Truppenführung im Kriege, 3., durchges. Aufl., Berlin: Mittler, 1890?
33	7662	G	1909	Hopen Şetad (独, 少佐)	Muharebe Dersleri : 5. Kitab Tabiye Mesâtîli (戦争講義: 第5巻 戦術の諸問題)	
34	7671	G	1882	Verdy du Vernois	Harb Oyunu (Kriegsspiel : 盤上戦争遊戯)	Julius von Verdy du Vernois, Beitrag zum Kriegsspiel : mit einem Plane, Berlin: Mittler, 1876.
35	7705	F	1908		Torpidito ve Projektörler (魚雷とプロジェクタ)	
36	7729	G	1887		Asakir-i Şâhânenin Piyade Sınıfına Mahsus 87 Modelî Mükerrer Ateşli Mavzer Tüfengi (皇軍歩兵用 87 式連発式モーゼル銃) ※ イフサントウ目録の Schillendorf, Mükerrer Ateşli Mavzer Tüfenkleri とは別	
37	7730		1898		Anelîyat-ı Muhâsara (包圍演習)	
38	7747	F	1892	Rav (Raou?)	Belçika Devleti Ordu Teşkilâtı (ベルギー国の軍制)	
39	7781	G	1895	Pedoya (大将)	Müntahabat-ı Usul-ı Tabiye (戦術のアンソロジー)	
40	7785	G	1907	Prens Hohenlohe (独, 大将)	Sahra Topçu Efradı (野戦砲兵)	Kraft Karl August Eduard Friedrich zu Hohenlohe-Ingelfingen, Ueber Feld-Artillerie, Zweite Auflage, Berlin: Ernst Siegfried Mittler und Sohn Königliche Hofbuchhandlung, 1887? もしくは Kraft Karl August Eduard Friedrich zu Hohenlohe-Ingelfingen, Die Feld-Artillerie in ihrer Unterstellung unter die General-Kommandos: Betrachtungen, vornnehmlich den Kameraden der anderen Waffen gewidmet, Berlin: Mittler, 1889?

41	7905	E	1922	Philip Alcer (米, 海軍数学教官)	Harici Balistik (艦外弾道学)	
42	7916	G	1922	Rurbek	Harbi Umumi Tecarubüne Müstenid Tabiyesi Esasiye (大戦の教訓による基本戦術)	
43	7939	E	1915	Enmin (ed. (編) Hale, 英)	Cedavili Bahriye ve Riyaziye (海図表と数学)	
44	8067	G	1922	Otto von Mauzer (大尉)	1914-1918 Harb-i Umumiye Mücmel Sevk-ül Ceyşe bir Nazar (1914-1918 大戦要約 / 戦略への一考)	
45	8110	G	1916 (1918?)	Herman Şağman (スイス, ライター)	Harbi Umumi Tarih (大戦史)	
46	8184		1901		Harakât-ı Askeriye-i Levhîyede Tenvirât-ı Elektrikiye (夜間作戦における電気照明)	
47	8234	F	1885	Rev (Raou?) (仏, 参謀大佐)	Ordu Teşkilatı 1.Cild (Rusya Devletinin Ahval ve Tensikâtı Askeriyesi) (軍制 第1巻 (ロシア国家の状況と軍制改革))	
48	8203	F	1885	Rev (Raou?)	Ordu Teşkilatı 2.Cild (Almanya ile Fransa'dan bahisdir) (軍制 第2巻 (ドイツとフランスについて))	
49	8213	F?	1887	Gtye (Gotier?)	Cep Telemetresi (携帯テレメータ)	
50	8237	G	1909 (1st.1898)	Fon Verdi do Vornova (Verdy du Vernois?) (大尉, 独元陸相)	Hidemat-ı Seferiye Tabikatu, 1.cilt (軍事演習)	Julius von Verdy du Vernois. Studien über Truppen-Führung の一部?
51	8238	G	1907 (1st.1898)	Fon Verdi do Vornova	Hidemat-ı Seferiye Tabikatu, 2.cilt (軍事演習)	Julius von Verdy du Vernois. Studien über Truppen-Führung の一部?
52	8346	E, F	1912	Sinanof (Semenov?) (露, 海軍中佐)	Çosima Muharebesi (対馬の戦い)	
53	8347	G	1916	Jofer?	Fransız Usul-i Taarruz ve Müdâaa (仏式攻撃・防御法)	Joffre, Joseph?
54	8356	F	1866	Lotrel (Lotrel?) (仏, 大尉)	Manevra-i Harbiye (戦術演習)	
55	8359	G	1898	Klauzeviç (Karl von Clausewitz) (独, 大尉)	İdare-i Harbe dair Kava'id-i Esasiye (戦争統帥に関する原則)	Carl von Clausewitz, Von Kriege, 1832 の一部?
56	8587		1895	Sây (Schel?)	Torpid (魚雷)	
57	8708	G	1919	(ed.) Prusya Mühendis Encümeni (プロシア技術者会議編)	Yakından Muharebe Vesâ'iti Meyânna Dâhil Mütüşehhib Ziyahı Projektör Takımı (近距離戦兵器に含まれる白熱光プロジェクタ・セット)	
58	8718	G	1890	La'an fon Dabhrî (Hans von Weihern?) (独, 騎兵大佐)	Elifbâ-yı Sivariyan (騎兵の初歩)	
59	8760	G	1925	FD, Leyn (独, 歩兵大尉)	Silahların Müsterek Tesiri (武器の共通する威力)	
60	8763	G	1908	Litsman (Karl Litzmann) (大尉, ベルリン大学元学長)	Takımın Muharebe Talimi (分隊の戦術訓練)	
61	8817	G	1919	S. Kropier (Krupter?) (技師)	Tayyare Talebelerine Muhtıra (飛行訓練生のための電書)	
62	8825	G?	1911	Fon Birn (中佐)	Piyade, Sivari, İstihkam ve Ağır Topcu Zabitan ve Küçük Zabitan mahsus Ders Endahlına Hazırlık Talimleri (歩兵, 騎兵, 工兵と重砲将校および下士官のための射撃授業への予備教練)	
63	8826	F	1909?	Piyeron (Pieron) (大尉)	Piyâdenin Harb Noktai Nazarından Tedrisine Rehber (歩兵の戦術の観点からの教育の手引き)	
64	8844	G	1919	Kıraşmar (Kretzschmar?) (独, 機関銃兵大尉)	Makineli Tüfenklerle Usul-u Endahl (機関銃の射撃術)	Johann Kretzschmar, Das Schießverfahren mit Maschinengewehren, 4.Aufl. Oldenburg i.Gr.: Stalling, 1914.

65	8850	G	1909	Fon Helfeld (Von Helfeld) (普、海軍高官)	Aneli Piyade Keşif Kolu (歩兵偵察隊)	
66	8865	G	1919 (1922?)	Topfer (miralay 大佐), Şvarte (中將)	İstihkam Hizmeti, Kale Harbi, Sahra Tahkimatı ve Lağım Muharebeleri (工兵任務、攻城戦、野戦築城と地雷戦)	
67	8902	G	1887 (1889?)	Granowski	Seyyar Torpido Risalesi (可動式機雷の論文)	
68	8924	G	1881		Meydan-ı Muharebe Toplarının Endahtı Kava'idini ve Bunlara Mütâallik Measatıl Vess'ireyi Havi Risale (野戦砲の射撃法とこれらに関する諸問題の論文)	
69	9136	G	1887	Von der Goltz	Erkân-ı Harbiye Vezâ'ifi Tabîkât-ı Nazariye ve Ameliyesi (参謀の役割、管理と運営の演習)	
70	9173	E	1921	Sir Charles V. F. Taunshend (Charles Rounny, F. Taunshend?)	Irak Seferim (わがイラク戦)	
71	10039	G	1921	Balk + 7人	Harb-ı Unumûde Fünûn-u Askeriye (大戦における軍事技術)	William Balck, Entwicklung der Taktik im Weltkrieg, Berlin: Eischensmidt, 1920.
72	10839	G	1910	Fon Kraft (独、少佐)	Piyadenin Gece Taiminleri (歩兵の夜間教練)	
73	11076	F	1921	Şarl Ru (Charles Roux?)	Çanakkale Seferi (チャナッカレ戦争)	
74	11077	E	1915	Yellis Asmit Bartlet (Ellis Asmead Bartlett?)	Çanakkale Raporları (チャナッカレ報告書)	
75	11179	G?	1915	C. Wagner (H. Wagner?) (オーーストリ ア＝ハンガリー軍士官、ライヒボスト 紙戦場特派員)	Bulgar Ordusuyla Muzaferiyete Doğru (ブルガリア軍と共に勝利へ)	
76	11226	G?	1922	Fon Zeitfert	Sumûfı Muhteliflerin Mütehiden Sevk ve İdâre ve Muharebesi (諸兵 科の統一的統帥と戦闘)	
77	11279	F	1917?	Laterzak (Laterzac?) (仏、元第5軍司 令官、大將)	Fransız Sefer Planı ve Harbin İlk Ayn (仏の動員計画と戦争の最初の 月)	
78	11286	G	1910	Von Der Goltz	Osmanlı-Yunan Seferi (1313-1897) (オスマン＝ギリシア戦争)	Colmar von der Goltz, Der Thessalische Krieg und die türkische Armee : eine kriegsgeschichtliche Studie, Berlin : Mittler, 1898?
79	11392	E	1916	Sir Con Nikson (Sir John Nixon?) (大 將)	Irak Seferine dair İhsaat (イラク戦に関する暴露)	
80	11443	G	1902	Fon Kunde (独、大佐)	Muharebât Kılâ Tabîkâtı (城塞戦演習)	
81	11474	E	1917		Irak'a dair Muharebe Nolları (イラクに関する戦闘ノート)	
82	11582	E	1898	Sir Esmit Bartlet (Ashmead Bartlette?) (英、下院議員)	Teselya Meydan Harbinde (テッサリアの戦場にて)	
83	11824	E	1915	Sir Rayen Hamilton (英、地中海遠征軍 司令官)	Çanakkale Darûlharbinde Vukua Gelen Muharebeler (チャナッカレの 戦場で起こった戦闘)	
84	12748	G	1919		Mevzî Muharebelerinde Düşman Tâaruzlarını Tard hak Kava'id-i Umumiye (戦場で敵の突撃を一掃するための一般原則)	
85	40044	G	1884	Von Ristof	Tarih-i Esliha (武器の歴史)	Rüstow, Wilhelm?

1. 言語

目録に挙げた文献のうち原著の言語が特定（もしくは推定）できたものについて、数が多いのはドイツ語、フランス語、英語である。その順番は、ドイツ語が最も多く 53 点（うち推定 8）、次はフランス語で 15 点（推定 1）、英語は 11 点である（表 3 参照）。言語の分布は、前述のイフサンオウル目録でも、ドイツ語 102 点、フランス語 89 点、英語 27 点で、順序は変わらない。表 3 は年代別の分布を示したもののだが、時代が下るにしたがってドイツ語の割合が急速に増加していくのが見て取れる。軍事博物館の蔵書は 19 世紀後半以後のものがほとんどであるが、それ以前の文献があればフランス語の割合はもっと高いものになったに違いない。オスマン帝国は、先述したように、ボンヌヴァルやトットなど最初にフランス語を通して西欧の軍事的学知を取り入れたからである。当初陸海軍の工学校、士官学校等の教官はフランス人、教科書・軍事教練の操典もフランス語であった。しかし、普仏戦争以後プロシア陸軍への国際的評価が不動のものとなり、世界的にプロシアに学ぼうとする傾向が強まっていく。オスマン帝国もまた例外ではなかった。さらに青年トルコ革命後政権の中枢になった統一と進歩協会派は、ドイツ留学を経験した青年将校が多く、親独政策をとったため、ドイツから軍事顧問団が招かれ、オスマン軍の再編に貢献した。こうした事情から 20 世紀に入ってから翻訳されたものはドイツ語文献の増加傾向が顕著である。

2. 分野

文献を分野別に分類すると以下のようになる。（ ）内の数字は原典がドイツ語のもの。

戦術・用兵：19（16）

演習・教練・操典：18（12）

砲術・兵器・装備（大砲・銃など）：17（12）

城塞・要塞：4（2）

戦史・回想録：17（7）

軍事情報〔オスマン帝国 1、諸外国 4〕：5（2）

海軍：4（1）

空軍：1（1）

表 3 翻訳書の言語別分布

年 代	ドイツ語	フランス語	英 語
1850-1865	1	1	0
1866-1885	4	4	0
1886-1905	18	4	2
1906-1925	30	6	9
計	53	15	11

翻訳された文献のうち軍事知識に関するものの多くの原典はドイツ語である。英語は戦史・回想録が目立ち、イラク戦線、ガリポリ戦争など第一次世界大戦に関するものが半数（5点）を占める。軍関係のものも3点ある。また、士官学校の教科書として利用されたもの、もしくは原典が教科書とされるものが15点あった（史料番号¹³ 3, 17, 25, 29, 33, 35, 40, 41, 47, 48, 56, 60, 61, 62, 67）。その言語の内訳はドイツ語が9、フランス語が4、英語1（米海軍士官学校教本）、不明1で、これもドイツ語が多い。外国の教科書からの翻訳の例をあげると、ドイツの士官学校の火器の教科書（3）がある。この本はオスマン帝国陸軍士官学校で火器についての教本として用いられた。訳者の刊行言辞には「ドイツ製武器をオスマン軍の武器に改訂した」こと、「以前翻訳されていたが、ドイツ語版が大きく改訂されたので新たに訳出した」ことが述べられている。また、『分隊の戦闘訓練』（60）は、元ベルリン軍事大学総長リッツマン將軍の『遠征軍における分隊・中隊・大隊の戦闘訓練』をオスマン軍も採用する最新のドイツ軍の教本に従って改訂したものであった。

3. 訳者と出版社

翻訳者は陸軍士官学校の教官が多く10人にのぼる。中には1人で複数の著作の翻訳を手掛けた者もいる。これに次ぐのは陸軍工学校の教官で6人を数える。担当科目は、ドイツ語、砲術、兵器学、城塞・要塞術、騎兵学、戦術、戦史など多岐にわたる。海軍士官学校の教官も1人含まれる。教官以外にもほとんどが陸海軍のさまざまな部隊に所属する軍人である。

出版社は、ほとんどが軍関係の印刷所（陸軍士官学校印刷所（Mekteb-i Fünûn-ı Harbiye Matbaası）、陸軍工学校印刷所（Müdüdendishâne-i Berrî-i Hümâyûn Matbaası）、『軍事雑誌』印刷所（Ceride-i Askeriye Matbaası）、軍事印刷所（Matbaa-i Askeriye）など）である。民間で多いのはアサドルヤーン社（社主は名前からアルメニア系と推察される）（Artin Asaduryan ve Mahdumları Matbaası）である。おそらく軍と何らかの契約を結んで印刷を請け負っていたのであろう。

4. 興味深い文献

翻訳書の中には歴史的に興味深い文献もある。1冊は、『トルコ人と共に戦いへ』（7）と題する本で、バルカン戦争に従軍したドイツ観戦武官と思われる人物の日誌である。著者フォン・ホーウェンシュタール少佐の序文によれば、彼はバルカン戦争当初からオスマン軍のマフムト・ムフタール・パシャが率いる第3軍の参謀本部と行動を共にした。そのため停戦までのすべての作戦を目撃し、それを毎晩日誌に書き記したという。この本で彼は、バルカン戦争の敗北はトルコ兵の戦闘力のせいでも、彼らの教練の基礎となったドイツ式の教育のせいでもないことを示したいという。もう1冊は『対馬の戦い』（52）で、日露戦争の「日本海海戦」の記録である。これはロシア海軍大佐シマノフの著書の翻訳で、訳者は最初英語版から翻訳したが、後にフランス語版と対照したところ英訳には抜け落ちがあることに気づき、修正をほどこしたという。この訳者の名がムスタファ・ケマルであるため、アタテュルク本人かどうか論争となっている。おそらくは同姓同名の

別人と考えられるが、日露戦争を題材とする本であるため、アタテュルク説も捨てがたいところである。

Ⅲ ゴルツの足跡

本稿で参照したイフサンオウルの目録および軍事博物館の蔵書において、著者名の記載があるものの中で最も多くの著作が翻訳されているのがコルマル・フォン・デア・ゴルツ（Colmar von der Goltz）¹⁴である。ゴルツは1883年ドイツ軍事顧問団の一員としてオスマン帝国に来訪し、1895年に帰国するまでオスマン軍の改革に重要な役割を果たした。青年トルコ革命後の1909年に再度招聘され1916年までオスマン軍の指揮にも携わった。特に軍事学校総監としての軍事教育に対する業績が高く評価され、滞在中4000頁にも達する軍事教範を翻訳させたという¹⁵。ゴルツの著作の翻訳はイフサンオウル目録では16点が挙げられている（表4参照）。そのうち、軍事博物館蔵書で7点を確認し、著者が明らかなため原典もいくつか特定することができた（表2参照）。ゴルツの著作は大きく二つのカテゴリーに分類することができる。一つは主に戦術に関する軍事専門書、もう一つはオスマン帝国に特化した論考である。前者には、当時国際的にも注目され日本語にも翻訳された『武装せる国民』（26）や『交戦と統帥』（8）が含まれる¹⁶。後者としてはオスマン帝国陸軍の分析（15）と『オスマン＝ギリシア戦争』（78）がある。これらの文献には翻訳者による序文や後書き、当時のオスマン帝国軍高官の寄稿などが付されている場合があり、そこからはオ

表4 イフサンオウル目録中のゴルツの著作：16冊

Amelî Erkân-ı Harbiye Vezâîfî（実践参謀任務）〔69〕
Erkân-ı Harbiye Vezâîfî（参謀任務）〔69〕
Erkân-ı Harbiye Vezâîfî, Kısım-ı Nazarî（参謀任務、監督部）〔69〕
Millet-i Müsellaha, Asrımızın Usûl ve Ahvâl-i Askeriyesi（『武装せる国民、今世紀の軍事情勢』）〔26〕
Plevne（プレヴネ）
Vakt-i Sefer ve Hazarda Erkân-ı Harbiye Vezâîfî（戦時および平時における参謀の役割）〔23〕
Muhârebât-ı Kılâ（城塞戦）
Müstakil Keşif Kolları（独立偵察隊）
Seferber Zâbitâna Mahsus Muhtra
Devlet-i Aliye'nin Zaaf ve Kuvveti（至高の国家（＝オスマン帝国）の弱点と強さ）〔15〕
Hidmet-i Seferiye（遠征任務）
Harbin Sevk ve İdâresi（交戦と統帥）〔8〕
Erkân-ı Harbiye Vezâîfî, Tatbikât-ı Nazariye ve Ameliye（参謀任務、監督・実践演習）
İlm ve Askerlik（科学と軍事）
Muharebeye Dâir Nefer Neler Bilmelidir（戦争について兵士が知るべきこと）
Osmnî-Yunan Seferi（オスマン＝ギリシア戦争）〔78〕

（〔 〕内は軍事博物館所蔵目録の史料番号）

スマン人側のゴルツへの評価を読み取ることができる¹⁷。ここでは2つほど例をあげよう。

『武装せる国民』をオスマン語に翻訳したメフメト・ターヒル大尉¹⁸は「訳者のことば」で以下のように語っている¹⁹。〔 〕内は筆者が補った。

〔本書は〕一つの奇蹟であり、〔著者〕自身にそなわった文学的・軍事的教養におけるこの上ない能力の一例である。軍事に関して現在書きうる最新の情報はすべて本書に収められていることが、あらゆるヨーロッパの報道において〔本書が〕詳細に語られる理由であり、軍事の世界全体で認められている。故に、このような完璧な著作がオスマン語にも翻訳され、人々の役に立つようにせよとの勅命が私に下された。〔中略〕著名な『レヴュ・ド・モンド *Revue de Monde*』誌が、賞賛の辞で、「陸相よ、もし祖国に真に貢献したいのであれば、本書をすべての将校に一冊ずつ配布すべきだ」と書いていることが著作の重要性を証明している。私が思うに、軍事について考察したい者は、数多くの軍事書を紐解く必要があるが、本書を始めから終わりまで読めば、他の本にあたる必要はなく、目的が達せられる上に、深い洞察力を持つものであれば、軍事知識に成熟することができる。〔中略〕わが国民は誕生以来軍事で名を馳せ、わが兵士の多くは軍人の申し子であるので、オスマン人たる、とりわけ軍人たる私は、本書を読むことを推奨することをけっして躊躇わない。〔中略〕オスマン人は、そもそも世界史上に「武装せる国民」としてその名を刻んできた。

この序文からはゴルツ自身とその著作への高い評価・信頼とオスマン帝国の軍事国家としての自負、過去の軍事的栄光の誇りを読み取ることができる。

『交戦と統帥』の訳者オスマン・セナイー²⁰は陸相への献辞で次のように述べている²¹。

今から2、3年前、フォン・デア・ゴルツ閣下は、『交戦と統帥』という特に士官学校の学生と全将校にとって極めて有益な大変重要な著作を出版された。〔中略〕ドイツ語版が出るや否やフランス語をはじめ、ありとあらゆる言語に翻訳されたことだけでも、本書の軍事的・学問的価値を示す最も明白な証拠となろう。〔中略〕陸軍士官学校と陸軍技術学校のすべての学生が軍事知識を広めるため、素晴らしい前述の本が出版された後は、各自1冊ずつ手に入れることをお許しくださるようお願い申し上げます。

この進言に従い、同書は全学生に配布されたようである。

以上2つの事例からも、訳者に代表されるオスマン帝国軍人のゴルツに対する尊敬の念と共に、彼の著作がオスマン軍人の間で必読の書とも言えるほど浸透していたことが読み取れる。

おわりに

オスマン帝国における西欧の軍事的学知の受容はまずフランス語を介して始まった。西欧化の幕開けとして知られるチューリップ時代に、フランスの文化・科学技術に強い関心を持った改革派の支配エリートたちはパリに使節²²を派遣した。西欧の学知はこうしてフランスから入ってきたのである。一方、彼らは活版印刷所²³を設立して西欧科学の専門書やそれを読むための辞書を出版させ

た。その中でも軍事知識は重視された。なぜなら、そもそも改革派が西欧化をめざした最大の動機は対西欧戦争の敗北、すなわち軍事的力関係の逆転を認識したことにあつたからである。軍事改革こそがオスマン帝国にとって喫緊の最重要の課題であつた。そこで、特に戦術・砲術・要塞学のような戦場で役立つ実践的な分野の文献が多く翻訳された。と同時に人材育成の観点から、フランスやドイツの士官学校の教科書や軍事教練の操典などもさかんに翻訳された。言語については、始めは直接フランス語から受容しており、お雇い外国人教官の講義もフランス語で行われ、教科書や参考書もフランス語で書かれたものだった。やがて西欧式高等教育の普及や外国留学等を通じて、オスマン人側にフランス語をはじめとする西欧言語に熟達する者が育つにつれて、西欧書物の翻訳が進んだのである。原典も当初フランス語が中心であつたが、次第にドイツ語・英語・ロシア語などの文献にも広がっていった。

19世紀後半、特に普仏戦争以後は軍事分野におけるプロシア（＝ドイツ）の比重が増加する。士官学校等教育の場では、トルコ語で授業が行われるのが通常となり、教科書もトルコ語で書かれたものが大半を占めるようになる。教官も多くはトルコ人のため、教科書もたとえ原典が外国語の文献であっても翻訳して使用された。そして、本稿で示した目録からは19世紀末から20世紀初頭にかけてドイツ語からの翻訳が急激に増加していく傾向が明らかとなった。

以上のように翻訳書の分野と言語は時代の要請によって変化していったのである。オスマン帝国の場合は、特にフランスとプロシア＝ドイツとの関係が色濃く反映したことが、本稿で提示した翻訳書のリストから明らかとなった。

本稿は、2019年度～2023年度科学研究費補助金・基盤研究1（A）「一九世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」（研究課題番号19H00547）による研究成果の一部である。

[注]

- 1 2019年度～2023年度科学研究費補助金・基盤研究1（A）「一九世紀を中心とした軍事的学知をめぐる人と書物の交錯」（研究課題番号19H00547）
- 2 新井政美の名著『トルコ近代史 イスラム国家から国民国家へ』の冒頭もカルロヴィッツ条約締結の場面から始まる（新井政美2001、みすず書房、p.1）。
- 3 ローマ教皇の呼びかけに答えてオーストリア、ヴェネツィア、ロシア、ポーランドが結んだ対オスマン軍事同盟。これにより西欧諸国の反撃が開始された。
- 4 鈴木董1993『オスマン帝国の権力とエリート』東京大学出版会、p.239。
- 5 ボスタンジ連隊はイエニチェリ軍団とは別組織で、スルタンと宮廷の警護、帝都と海峡の治安護持を任務とした。伝統的にボスニア出身者から成る精鋭部隊であり、スルタンの最も忠実な僕であった。
- 6 セリム3世の治世については、Show, Stanford J., 1971, *Between Old and New (1789-1807)*, Cambridge, Mas. 参照。
- 7 主にバルカンのキリスト教徒の農村から少年を徴用してムスリムに改宗させ常備軍兵士とした制度。
- 8 BOA.C.MF111-5506.
- 9 İhsanoğlu 2004, Cilt 2, pp. LXXXII-XCIII.
- 10 うち史料番号9,37はタイトルが同一だが別の本であること、82はイフサンオウルを表にはないことが判明したが、

翻訳書であるのでリストには掲載した。

- 11 書名、著者名等が不明な文献について、確認する手がかりとしてオゼゲの『旧字によるトルコ語文献目録』(Mehmet Seyfettin Özege, 1971-1979, *Eski Harfli Türkçe Eserler Kataloğu 1901-1981*, 5 cilt, İstanbul, 1729-1928 年にオスマン帝国で出版されたオスマン語文献の総合目録。掲載された文献数は 25,554 点におよぶ)を参照した。
- 12 ドイツ語文献の原典の特定・推定については、東京電機大学の中島浩貴准教授に協力していただいた。
- 13 以下 () 内の数字は表 2 の史料番号を示すものとする。
- 14 ゴルツについては、藤由順子 2011「コルマール・フォン・デア・ゴルツとオスマン帝国陸軍」(『三宅正樹他編『ドイツ史と戦争「軍事史」と「戦争史」』渓流社 pp. 339-364, Karaman, Mehmet Ali, 2019, *Osmanlı'da Bir Alman Subayı / Colmar Freiherr von der Goltz / Müdâfaa-i Milliye ve Asker Mecmûası'ndaki Yazıları*, Ankara, Berikan Yayınevi 参照。
- 15 藤由順子 2011, p. 350。
- 16 ゴルツの著作は日本でも 5 点翻訳されている(同, p. 341, 注 (1))。
- 17 トルコ人研究者カラマンは、ゴルツがその業績と人格からオスマン帝国軍人・知識人・官僚たちに多大な影響を与えたという。当時の重要人物たちの数多くの回想や新聞の論説にはゴルツに関する称賛にあふれた紹介がある他、様々な軍事出版物でゴルツの思想と人物への賛辞に出会えるとし、これに対しゴルツ自らも筆をとり、トルコ人兵士や指揮官たちのプライドをくすぐる言説をこめた著作を残したと述べている (Karaman 2019, p. 3)。
- 18 Mehmet Tahir. 陸軍士官学校参謀クラスのドイツ語教官。ゴルツの副官も務めた。
- 19 史料番号 (27) からの引用。「訳者のことば」として冒頭に記されているが頁番号はない。
- 20 Osman Senai. 戦術・要塞演習教官, 参謀准尉。
- 21 史料番号 (8) pp. 3-4 より引用。
- 22 使節団の長イルミセキズ・チェレビ・メフメト (Yirmisekiz Çelebi Mehmed) (?-1732) はフランス見聞の報告書(『大使の書 *Sefâretnâme*』)を著した。
- 23 ハンガリー人の改宗者イブラヒム・ミュテフェリカ (İbrahim Müteferrika) (?-1747) によって経営された活版印刷所では、1729-42 年の間に 17 タイトル、約 1 万 1 千部の本が印刷された。